

田村 宏先生 対 中田喜直先生



名ピアニストであり、名教授者でいらっしゃる田村 宏先生と、これまた「雪の降る町を」など、日本中の誰もが知っている名曲の数々を作曲されている中田喜直先生とは、音楽大学時代の同級生でいらっしゃるのか。

ある日、お忙しい中をお二方にお話していただいた。

音楽を学ぶ者、指導される方々にとって、ぜひ聴いていただきたい話題が次から次へとつぎ出し、楽しい一時であった。誌上で御紹介したいと思う。

田村・中田両先生の出会いとは……

司会 今日はお忙しいところ、お時間を削ぎくださいませ。本当に有難うございます。何でもしゃべろう会ではございませんが、特にテーマは設けませんでしたから、御気軽に何でもお話しをしていただきたいと思います。

ところで、田村先生・中田先生との出会いのようなものから伺いたいと思います。

中田 御存じかと思いますが、僕、芸大のピアノ科なのです。田村さんとは同級生で、学校での期末テストなんか、アイウエオ順でしたから、田村さんのあと僕で、すばらしく上手なピアノの後に僕が弾くかっこうで、とても気遅れがしたもんです。

田村 いや、とんでもない。彼には別の才能があった。

中田 いや、それ本当。こんな上手な人がいるとピアニストになる勇気がなくなってしまいますよ。

まあ初見がきいたので、声楽科の人の伴奏を沢山したのです。それが、作曲する上で非常にプラスになったと思います。ピアノ科に入ってよかった事はたしかです。

この間も誰でしたかに「あなたは何か作曲家になれたのですか」と問われて、「芸大の作曲家を出なかったから」といったんですけれど。(笑)

音楽大学への提言……

司会 学校教育に問題点があるということでしょうか。では、今の音楽大学について、何か考えていらっしゃる点がありましたら、御意見をお聞かせください。

田村 今日、中田さんとお話するというのでいろいろ考えて来たところなんです。今の音楽大学の制度では、個人レッスンのあり方ということが非常に問題になってくると思うのです。

結論的に申しますと、学校内での実技の個人レッスンを一切止めたかどうかと思うのです。もっともこれは少し暴論ですが。

こんなことって良いかどうか分からないのですが、

同じ授業料を払い、同じ権利を持って入学した学生が、先生の担任時間に制限があるので、希望した良い先生に師事できないで、あまりバツとしない先生に廻される、それがいやなら入学取消し、というのが、だいたいの現状なのです。どこの音大でも、学生たちのそういった不満をかかえているようです。

これを解決するには、先ほど申しましたように、学校教育では個人レッスンはしない。個人レッスンは、学校教育の枠外でやる。そうすれば、実技の先生は皆、これ（首切りのまね）になるわけです。無能教師にとっては死活問題になるわけですから。

中田 そういうこと今迄に提案したことありますか。

田村 いえありません。笑。話話的に話したことはありますけれど。

中田 そういうこと、どんどん提案すればよいですよ。即ち、生徒の方では芸大の教授という肩書きに対して習いに行っているのであって、その先生の実力に対して習いたいというのではないのです。

それは作曲科の方でもいえるのではないですか。よく若い学生が芸大の作曲科に進みたいといってくる。ですけど、芸大の作曲科にはいると作曲できなくなるかもしれないから止めなさいといっているんですよ。

司会 芸大の作曲科を出て、作曲家として御活躍していらっしゃる方、大勢いらっしゃいますでしょう。

中田 それは大勢いらっしゃいます。だけどそういう方、芸大をでていらっしゃらなくても、作曲家になっていらしたでしょうね。

司会 学校教育のお陰ではないということですね。

田村 少しずつ良い方向に向ってはいるとは思いますけれど。

何年か前、他の一般大学でゲバ騒ぎがありましたね。ところが芸大だけはあまり大きい騒ぎはなく終って幸ででしたが、後で考えてみると、そういった機会が、学校を良い方向に向けて改革するチャンスといえるかも知れ

せん。勿論、騒ぎを起すこと、それ自体は決してよいことではないですが。

中田 学生運動などは、行き過ぎの面もありますけれど、改革するチャンスでもあったかもしれませんね。

司会 フェリスの場合、いかがですか。

中田 フェリスの場合、学校全体が明るい感じで、変な先生がいませんから、あまりそういう問題はないようですが、女子の学生ばかりなので、一般的な常識に少し欠ける所があります。

例えば、シベリウスとか、レスピーギが、だいたいいつ頃の人で、どこの国の人か、主だった作品位は知っていて欲しいと思うのですが、それを知らない。試験の時によく半年月日や、死んだ年など正確な年代を丸暗記したりしますが、そんなことは必要ないのです。大体の所を知っていればいいのです。フェリスにかぎらず、音大の学生、特に女の人は音楽の常識のない人が多いですね。ピアノでも歌でも、試験の曲だけはよく練習したり、単位のために丸暗気的な勉強はするけれど、幅広い音楽的な知識というか、常識がないですね。ひどい話があるのですが、ヤマハで音楽大学をでてきた方を試験した時、卒業試験にうたったという歌曲を歌わせて、今の曲は誰の作品ですかと尋ねたら、「あら」といってその作曲家の名前を知らなかった、というようなことがあるのです。

作曲家の名前を知っていたとしても、そのうたが、たとえばあるオペラのアリアのような場合、どういう状況でうたわれる曲なのか、などということ知らずに原譜でうたっているというようなことは、ままあることです。そういう事の他に、簡単なメロディに自分で和音を考えてつける、という事が殆んど出来ない。

司会 学生さんの心構えも問題ですが、教育に欠陥があるということも考えられますね。

中田 そうです。僕らの学生時代、音楽史の時間など実に粗末なものでしたよ。先生がノートを読みあげる。専門がバロック時代の先生であれば、バロック時代のことしか教えてくださらない。

田村 僕は音楽史なんか何を教わったかまったくおぼえていませんね。

中田 僕よく覚えているのだけれど、ベートーベン位迄で、現代までなんか行かないのですよ。

まあ、先生がどうあれ、自分で勉強すべきですよ。女の子というのは、学校で学んだことしか勉強しない。

司会 試験にでることしか勉強しないのですね。

中田 一つの曲を4ヶ月も半年もかかって弾いて、そればかりに集中している学生が多いのです。

司会 ピアノの先生方も、音楽会に行ったりテレビを見聴きしたりしてレパトリーを拡げてくださいとお願い

したいですね。

田村 さっきの話の蒸し返しですが、実技の先生は一度職籍を離れるべきです。そうすれば、一流の先生のところに一流の学生が集まる。たとえ、多少月謝は高くてもそういった学生たちは、どうしてもその先生に師事したい生徒たちです。決して〇〇大学に入りたいために高い月謝を払って通う生徒たちではないわけです。

司会 音楽大学無用ということになりますか。

田村 結論的にいえば、そういうことになるかもしれません。

中田 まあ、実技の勉強は大学でなくても勉強できるということでしょう。ただ一般知識を得るとか、友だちとの交流を持つということにおいて、学校は非常に便利だといえると思うのです。そこで、グループでできるものは大学で大いにやり、個人レッスンのようなものを無くせばよいということでしょう。

田村 そうです。集中講義とか、公開講座というようなものは大学でし、個人レッスンをやる場合は、聴講を自由にさせるとか。ただり個人レッスンの場合、人に見せてよい段階とそうでない段階があると思うのです。私たちの立場から言えば、預けられた学生は責任を持って上手にさせなければいけないのですから、叱咤勉強しなければならないことだってあるわけです。そういう時に、他の人が見ていたのでは、本人にも聞きに来ている人にも不快の念を抱かせることになります。

中田 ですから公開レッスンと個人レッスンの場合とわければよいでしょう。

お稽古ブームに寄せて……

司会 ところで最近のお稽古ブームについて、田村先生はどのようにお考えですか。

田村 ピアノをお稽古するという事は、大変よいことですし、お稽古をする方々が増えるということは、大変よろこばしいことなのですが、専門家を目指す人が多すぎると思うのです。

司会 そうですね。だれでもピアニストになれるとは限らないわけですから。専門家になるには無理ではないかというお子さんは、相当小さい頃からわかると思うのです。それでは、趣味でやる方と専門でやる方では、指導方法が違ってよいものでしょうか。

中田 それが問題です。音楽をやる上で、例えば、指揮をやるにも、作曲をやる上でも、声楽の方に進むにしても、ピアノが基礎なのですから、それを小さい時にあなたはピアニストにはむかないからといって、お楽しみの方向に進ませてしまっただろうかと思うのです。つまりピアニストにならなくても、音楽の専門家になるためには、お楽しみでなく、ピアニストになる位のつもりでピアノを練習する必要があるんです。

## 同 級 生 交 談



田村 専門家になれる条件が揃っているかどうかは、わかると思いますが……。

ところで、いろいろ教育が一度に総合的にできるというものは、ピアノのお稽古の他に見あたらないような気がするのです。

例えば、考える力、集中力、感受性とか、運動神経、忍耐力とか根生だとか、いろいろなもの一度にできるという点で、ピアノの

お稽古は大切なものだと思うのです。

これをすぐに専門家への道と安直に結びつけられては困るのです。

司会 私共の会員は底辺の教育をしていらっしゃる先生方が大部分だと思うのですが、心したいことは「才能をつぶさない教育を」ということなのです。

よくあることなのですが、ああもしあの先生に指導受けたなら、もっとのびたであろうと思うことがあるのです。

中田 そういうことはあるでしょうね。

田村 子供でも大学生でも、一対一の教育というのは、歯車が噛み合えば大変よい結果が得られると思うのですが、いったん歯車はずれてしまうとどうしようもありませんね。

必ずしも優れた教師が、すべての生徒たちと歯車が噛みあるとは限らないと僕は思うのです。

中田 相生というものでしょうか。

田村 そうですね。世間的には優れた教師だということで、父兄も生徒もその先生に師事さえしていれば、上手になると思いきこんでいる場合が多いですよ。どうも指導の相生というか、うまく歯車が合わないという時は、先生は他の先生を紹介する勇気が欲しいです。人間は機械じゃないのですから。

中田 それは、小さな子供と町の先生の場合だっていえることですね。

田村 まあ、教わる側からいうならば、先生についたら、やはり、生徒の方でも先生とウマが合うようにできるだけ努力することが必要でしょうね。もっとも小さい子供の場合は勿論無理と思いますが、その場合はお母さん

が、よく気をつけることしょう。

司会 まあ、相性がよいというか、この生徒を上手にしたいと思ったら、お金なんか問題でなくなると思います  
田村 そうです。この生徒を教えたらお月謝がはいるなんて考えたら、本物の教育ではできない。

教えるということは、キザない方ですけど、先生の熱意です。これが教育の根本です。

中田 教えた結果、たまたま月謝がはいってくるということですね。作曲なんかでも同じことがいえるので、よい作品を作ろうと一生懸命やった。そうしたら、作曲料がはいって来た、お金が入るということは結果なんですよ。

司会 中田先生のデビュー曲は、「六つの子供の歌」ですか。

中田 ええ。

司会 その時は勿論、この曲を創ることによってお金を得ようなんて考えられたわけではございませんでしょ。

中田 そりゃ、若かったですから、いい曲を作って認められたいというような気持はありました。だけど芸術歌曲がお金になるなんて考えられないことです。

ポピュラーの歌だって、お金のためにこれを作曲してやろうなんて考えたら、もう良いものはできません。

田村 そうでしょう。

この〈東音〉ピアノゼミナールについても、はっきりいって申し訳ないのですが、お車代しかでない。だけど社会的意義があると考えるから御協力するのです。お金のためだけなら、出られませんよ。

司会 本当に、今日まで続けられたのは、先生方のお陰なのです。これは特に強調させていただきたいことなのです。本当に御協力くださいました先生方に心から感謝致しております。

中田 これは、お金もうけのためにやっているのではないということは、誰でも知っていることです。福田さんの熱意に先生方御協力くださるのですよ。

司会 本当にただただ、御協力くださった先生方への感謝の念で一杯です。

ところで、先生方地方にも度々お出かけになられるのでしょうか。

田村 この間、名古屋に行った時、朝ホテルで暇にあかして新聞をすみずみまで読んでいたら、丁度、新学期前だったせいか、こどもを小学校に入学させるに際しての母親の心得的なことが書いてあった。その一つとして、「親は子供を学校へ入れても、他の子供と一際比較をしないということを決心しなさい」と書いてありました。

## 同 級 生 対 談

そのあと、公開講座がありましたので、その話を致しましたら、皆さんがよいことを話してくださいました、なんておっしゃってましたけど、私がよいことを言ったのではなく、新聞によいことがのっていたので……（笑い）

司会 そういう意味からも、一般のピアノ指導者の方々が、一人一人の子供の個性に応じた指導をやって欲しいのです。

その願いをこめて作りましたのが、この音楽レッスンノートなのです。あとで御説明させていただきますが。

田村 そうですよ。他の子供が何を弾いたっていいわけで、自分の子供が、指がまわらなければ、チェルニイ30番の一番を一生懸命弾いて、それをおさらい会に弾いたっていいわけですよ。

練習したものが、身につけばよいのですから。

中田 子供音楽コンクールなんかで、よく出会うことなんですけど、小学校五年生位の手の小さな子供が、ショパンの幻想即興曲などのむずかしい曲を、めっちゃめっちゃに弾いているというようなことがあります……。

田村 どこかで聞きましたよ。中田先生の採点が、からいって。

中田 どこで聞かれたのでしょうか。私は、小学校五年生ならその年齢相応に、その人に合った曲をきちっと弾く方が好きなので、むずかしい曲をめっちゃめっちゃに弾いている人には、よい点をあげないのです。

それほど辛い点をつけているとは思っていないのですけれど。

音楽コンクールに寄せて……

司会 コンクールの審査員は、どなたが定めるのですか。

田村 主催者側の委員ではないですか。

司会 コンクールにおいては、審査員が重要な位置なのですから、審査員が問題ですね。

中田 そうですね。コンクールとか、賞とか、を選ぶ場合、審査員は本当に大切です。審査員はよっぽど、ちゃんとした考えを持っていないければいけないと思うのです。

田村 優劣をつけたいこともありますね。

中田 それはあります。

田村 その場合、最得は審査員の趣味だと思うのです。それについての余談ですが、このところ、クラシックギターコンクールの審査をたのまれているのですが、本当にびっくりしました。

中田 うまい？

田村 うまいことは勿論ですが、ピアノなんかより音楽的な格調が高いというか、本当にすばらしいですよ。

中田 本当にそうかもしれないですね。ピアノなんか、小さい時からやらせられているとか、親のみえでやっているとか、惰性でやっている人がいますけれど、ギターなんか、本当にギターが好きでやっているのでしょうか。

田村 キメが細かいというか、ギター音楽のすばらしさ。審査員を引受けて本当によかったと思っています。

ところで昨年のごことでしたが、このギターコンクール本選でこんなこと体験したんですよ。

一人は男性で演奏は完璧なんですけど、魅力に乏しい。もう一人は女性なんですけど、キメは荒っぽい、だが、非常に魅力的なんです。音楽がですよ。（笑い）

どちらに一位をつけようかと、本当にまよってしまいましたね。採点用紙の上で、1、2位の順位を五、六回消したり書いたりしましたよ。

意を決して女性の方に一位を入れましたら、他の審査員もその女性を推したのが多く、結果的にたしか五対一でその女性が一位になったのです。

ところがいよいよ順位発表で、審査委員長が会場のステージ上で審査結果を発表したのですが、一位の時だれも手を叩かない、二位男性の名をよみあげると、拍手がなりやまないのです。会場全体の空気が、この審査結果に大不満だったわけです。

婦りに夜討ちでも合うかと思ったほどでした。

中田 ほうめずらしい事でしたね。

田村 それで、批評を書いてくれといわれましてね、審査委員長だけでなく、審査員全員が評を書くことになりました。

そこで、僕は次のような例をあげて、その時の審査結果についての所感を述べました。数年前、ピアノのコンクールで、私の弟子が、完璧な演奏をしたにもかかわらず、落ちたことがある。その時、高名な評論家になってかかったら、その批評家曰く「私たちは、ピアノ音楽に限らずあらゆる音楽を聞いていますよ。指がもつれたとか、あそこの弾き方はどうのという事は、ピアニストのあなたがたにはかなわないけれども、音楽を沢山聴いて



## 同 級 生 対 談



いるという点においては、あなた方の比ではありませんよ」といわれて引き下がったことがあるんですが、そんな例も書いて、五、六枚にわたって、こういうみかたもあるのだということを述べました。

中田 そういうことってありますよね。

田村 最後に、私の趣味で一位の断を下したとはっきり書きましたよ。

それが何か打算的な理由でもって順位をつけたのなら不正だと言えるかもしれませんが、優劣つけがたい時、どちらもよいという時には、自分はこちらが好きなのだというより仕方がないのではないですか。

中田 それはそうです。好きだということですね。

司会 芸術なのですから。スポーツの競技とは違います。

中田 それでよいのです。

田村 二人とも確に上手であった。むしろ男性の方が上手であった。しかしその女性の演奏は、私の心にうったえたという点で格段の相違があったのです。

中田 それが芸術ということですよ。

田村 これと同じようなことが、ピアノの場合だってあると思うのです。

モーツァルトの作品を弾いたとします、ある人は、モーツァルトの様式にかなった、いわゆる表面的には正しい弾き方をしていた。他の人は、およそモーツァルトのスタイルとはほど遠い、極端に例ればショペンとかシューマンのスタイルで弾いた。がしかし、その演奏は、聴く人の心を非常に打つものがあり、魅力にあふれた演奏であったとします。この場合の両者の優劣については、恐らく迷う審査員が多いのではないかと思いますね。

中田 そうです。音をはずすことがあってもコルトーのピアノはいいですよ。

田村 ですから最後の決断は、審査員の主観、趣味に待つより仕方ないと思うのです。

中田 ええ、だから審査員の数は多くないといけないと思うのです。二、三人では片寄ったみかたををするという危険性がありますから。

司会 ピアノとかバイオリンとか、演奏のコンクールはよいとして、作曲のコンクールはどうなのでしょう。

中田 それがかもってひどくなるんです。まあ、モーツァルトとベートーベンの演奏というのは、いくら好みがあるとしても、ある程度の標準的スタイルというものがあるでしょう。

ところが、作曲の面では新しいというか、試みという

か、コンクールでの規準になるものがないのですから。いわゆる前衛といわれる人と、そうでない人と根本的に考えが違ってしまう。だから、メロディがあるようなものももう古いと思っている人もいますからどうしようもない。

司会 中田先生はいろいろな賞をとっていらっしやいますけれど、毎日コンクールは何位でしたか。

中田 二位でした。

田村 あれは僕の責任なんです。その時はね……。

中田 いや、とんでもない。正直いって僕のが曲悪いの。あの時のピアノソナタ、一楽章はまあまあ、多くの方が印象に残っているといってくる位だからよいとして、二、三楽章がだめだったのです。

あれから、五、六回書きなおして、昨年二十年振りです。やっと出来上がったのです。それ位自分で満足しないできたのだから、当然二位になって仕方ない曲だったんです。

昨年できた曲が、もしコンクールに出せたら一位になっていたかもしれないけれど。

田村 あの時の一位は、一柳さんの曲で松浦豊明君が弾いたんです。僕が弾いた中田君の曲が二位で、僕の責任のような気がしましてね。

中田 あの時、平尾貴四男さんだか、非常に迷ってまあ、一票位の差で、僕が二位になったのですって。

一柳さんの曲は、きちっとできていて、いわゆる完璧だったわけ、魅力はね、僕の一楽章だけをとれば、僕の曲の方が分があったかもしれない。

田村 一柳君は松浦君にたのんでよかったですよ。

三位はだれでしたっけ？

中田 亡くなった宇賀神さん。それは、確か梶原完が弾いたと思いました。

田村 そうそう、演奏者はみんな僕らの仲間だった。

司会 その年(昭和24年)のコンクールは、作曲家もピアニストもすばらしい才能の持主が続いたわけですね。それ以後コンクールをにぎわした作曲家たちは？

中田 間宮さんとか薫さんなんか、今活躍している作曲家の多くは、コンクールの入賞者です。

司会 先生方とちょっと年代が違うので感じるのですが、音楽コンクールにはいった曲は、あまり演奏されない、と。

中田 でもやっぱり、ずっと見ていますと、コンクールに入賞した人は、その当座は活躍していますし、実力はあると思いますよ。

田村 確かに、コンクールでも入学試験でも合格する人は、力がありますよ。だけど落ちたからといって、合格した人間より力がないかといういい方には大分問題があると思いますよ。

よい先生が欲しい……。

司会 才能をつぶす先生がいるということを常々遺憾に思っているんですけど。

中田 いやね、才能というのは、先生によってこわれてしまうような才能なら、本もの才能とはいえないのではないかと思うのです。

少くとも、大学にはいる位といえども、十七・八才でしょう。その頃なら、もうリサイタルが開ける位なけりゃ、才能があるとはいえないのではありませんか。

## 同 級 生 対 談

小さい子供の頃に、才能をつぶされるということはあ  
るかもしれませんがね。

田村 そうですよ。

司会 では、才能があるといえる人は、何万人に一人位  
しかいないのですね。

中田 そうです。才能があるなんていえる人は、何年に  
一人であるかでないかですよ。

司会 では「これからの音楽教育」の方向としては、ど  
う考えるべきでしょうか。

中田 何もね、そんな多くの演奏家が必要ではないでし  
ょう。

田村 いらない。ただいい先生が欲しい。

中田 そう、いい先生とか、家庭にはいって音楽のわか  
るよいお母さんが欲しいわけ。お母さんがりこうになれ  
ば子供がよく育ってくれるはずだから。

田村 今ね、自分の子供をピアノ習わしたいと考えて  
も、誰につけたらよいかという段になって、はたと困る  
んです。

司会 子供を教えていただくんですから、田村先生クラ  
スの先生方をお願いするのでは、

中田 ちょっともったいない。

田村 いや、そんなことはないですが、ただ子供を教え

た経験が浅いから、子供は教えられないのです。

テレビなんかで、子供を教えていますけれど、あれは  
一つのショーですよ。わるくいえば責任がないのですか  
ら、一生懸命練習しなさいですまされる。(笑)

司会 子供の機能を本当にのばしてくださる先生が欲し  
いということですね。

中田 その子供と一口に言っても、手ほどきをする段階  
と、小学校四、五年頃から、もう子供というだけでなく  
音楽を教える段階では、指導に違いがあると思うので  
す。

司会 両先生のお話から、私共が考えていたことが、あ  
やまりではなかったと感じました。

ピアノの教師のベテランを育てるというか、理想的な  
音楽教育を目指すならば、それを実行できる音楽教師を  
養成していかなければいけないということですね。

「すばらしい先生方がさらに多くなるよう、これからも  
ゼミナールやその他いろいろ計画をたてていきたいと思  
いますので、田村先生、中田先生、どうぞ御力添えくだ  
さいますようお願い申し上げます。

今日は、本当に楽しい一時を過ぎていただきまして  
有難うございました。

## プ ロ グ ラ ム

ピアノ奏法系統的研究 第8次

## 田 村 宏 公 開 レ ッ ス ン

— 作 曲 家 と 共 に —

日 時 1971年5月17日(月) P.M. 6:30

場 所 渋谷カワイサロン

第1回 スカルラッティ

教 材 スカルラッティ ソタナ L.413 d-mol 安平邦代 他

L.422 d-mol

L.463 D-dur

L.465 D-dur

田村 宏先生編のスカララッティ 作品番号 出版社別対比表を会場に用意しました。

第2回6月14日(月) 第3回7月19日(月)12日と発表しましたが変更になりました。御容赦ください。